

どゞのみぞ御ぞうの中に六十餘までおはし、四分一のいへにて大饗し給へる人なりとみの
こうぢの大臣と申す、

〔枕草子八〕ゑせもの、所うるおりの事略○中 大饗のところのあゆみ

〔枕草子春曙抄八〕大饗のところのあゆみ 二宮大饗、大臣大饗等也、あゆみとは或説に云、大臣
などの御慶賀に學生ども列參して、嘉辰令月歡無極といふ詩を朗詠して、腰指の絹を給ふ事
云々、公事根源云、二宮とは春宮中宮を申也、王卿以下本宮に參じて拜禮の事あり、次に玄輝門
の東西の廊にして饗につく、先中宮の饗につく、次に春宮の饗につく、三獻の儀有云々、猶江次
第二委シ、大臣大饗は前に委注、あゆみとは歩の字也、江次第に勸學院の歩といふ事もあり、常
にはことなる事なき學生などの此折に所をうるを云にや、

〔後拾遺和歌集春〕おなじ屏風入道前太政大臣 大饗し侍ける屏風に、大饗のかたかきたる所をよみはべりける、

入道前太政大臣道長藤原

君ませとやりつる使きにけらし野邊のきゝすはとりや玄つらん

〔夫木和歌抄三十六〕攝政家御屏風 大臣大饗會所樂舞有所拜禮

祭主輔親

萬代の舞の袖ふるやどにこそあるじたづねてもろ人もくれ

〔兼盛集〕大臣家大饗する所

ひきつれて大宮人のきませれば春うれしくもおもほゆる哉

〔古事談臣節〕景家○中 最期ニ何事か思置事有哉ト、問人アリケレバ、無別之遺恨、但大殿大饗之時、

山鳴ノ醬焦被召之時、山鳴ノナクテミヤマ鶴ノヒシホイリヲ、マキラセタリシ事ナン遺恨云々、

〔今昔物語二十六〕利仁將軍若時從京敦賀將行五位語第十七

今昔利仁ノ將軍ト云人有ケリ○中 而ル間、其主ノ殿ニ正月ニ大饗被行ケルニ、當初ハ大饗畢ヌ